

旅路——万葉の歌と環境——

はじめに

本稿は、上代文学会主催の第三十七回万葉夏季大学（平成元年六月二〇日）七月二日、国学院大学百周年記念講堂の「万葉の歌と環境」という総テーマのもとに、古代の歴史的・社会的・自然・地理的環境を取り上げ、万葉歌との関わりを明らかにしようという講座の一つを担当した、その草稿に補筆したものであることをお断りしておきます。なお、その内容は次の通りです。

宮 都	国際日本文化研究センター教授	中西 進
吉 野	國學院大學教授	尾 畑 喜一郎
東 国	立正大学教授	近 藤 信義
越 国	二松学舎大学教授	針 原 孝之
筑 紫	共立女子大学教授	阿 蘇 瑞 枝
境 界	共立女子短期大学助教授	三 浦 佑 之
庭 園	京都産業大学教授	金 井 清 一
海 浜	明治学院大学教授	糸 川 光 樹
旅 路	大妻女子大学教授	川 上 富 吉

一

川 上 富 吉

今回の総テーマ『万葉の歌と環境』の中、私に与えられた課題は、『旅路（たびぢ）』であります。

このようなテーマが私に廻ってきましたのは、一つには、本学会の二大行事の一つであります「万葉旅行」を、かつて、先師森本治吉博士のご案内のお手伝いをしたりしていたからでしょう。万葉集の多くの研究者の中、万葉故地をくまなく、一再ならず、みずからの足で歩き廻って研究した人は、『万葉の旅（上・中・下）』^{（注1）}を著した大養孝先生の外、そう多くはいないと思えます。露木悟義氏^{（注2）}ぐらいでしょうか。

二つには、昭和五十二年度の第二十五回万葉集夏季大学『万葉地理の世界』において、「万葉時代の都城・国衙・郡家」^{（注3）}というテーマで、大きな点としての都市（大・中・小）を場とした歌のあり方について述べたことがありますので、その点と点の間の線である「旅路」について、今回、補充するようにとのことなのだろうと思えます。

さて、「旅路」ということでありますが、辞書的な知識は、共通理解の目安となりますので、先ずはそこから初めてみることにしましょう。

『岩波国語辞典 第四版』には、「旅行の道筋。旅行の途中。また単に、旅」とあります。

「旅」は、

〔旅〕

リヨ ①家を離れて歩きまわること。たびする。たびたびと。「旅行・旅人・旅客・旅雁（がむ）・旅宿・旅館・旅費・旅程・旅装・旅情・旅愁・旅券・行旅・驛旅（より）・逆旅（りやく）」

とあり、「旅（たび）」については、「自宅を離れてよその土地へ行くこと。旅行」とあり、「旅行」は「よその土地へ行くこと。たび」「旅人（たびびと）」は、「旅行している人」「旅程（りよてい）」は「旅行の行程、距離。旅行の日程」「行旅（こうりょ）」は「旅をすること。また、旅人」「驛旅」は「たび。また、旅人」となっています。『広辞苑 第三版』には、「旅行の道筋。旅の道中」とあり、『日本国語大辞典』には、

たびーじ…ち【旅路】【名】旅の行程。行路。旅さき。日葡辞書「*latia* (タビヂ)。すなわち、タビノミチ」俳諧・続虚栗「峯入は宮もわらぢの旅路哉へ宗因」俳諧・俳諧新選「春見初ると日々に蝶見る旅路哉、へ太祇」鉄道唱歌〈大和田建樹〉東海道「月を旅路（タビヂ）の友として」

となっています。「行路（こうろ）」は、『岩波国語辞典』に、「みちを

歩いてゆくこと。その人」となっています。

これらの解説を参考にしていえば、「旅路」は、字音どおり読めば「ロジ・リヨジ」で、訓読すれば「たびぢ」で、その意味は、「旅路・旅の路・旅する路」で、「旅路」路を旅する」ということになるのでしよう。

ところで、『万葉集』そのものには、「旅路」という表記例は見当りません。ちなみに、『万葉集総索引・漢字篇』によれば、

旅 訓義 タビ ○宿 ○行衣 ○約 ○人音讀 □ 行
○羈 ○羈 ○歌 ○羈 ○歌 ○情 ○愁 ○心

とあって、「旅路」に近いものとして、「行路（ギヤウロ・コウロ）」「羈（羈）旅（キロ・キリヨ・たび）」の二語があります。

「行旅」の用例は、

筑紫娘子贈三行旅一歌一首 娘子字曰兒嶋
思家登 情進莫 風候 好為而伊麻世 荒其路（3三八一）

の一例のみで、「タビビト」で、姓名を明らかにしないが、京より下つてゐた官人で、都へ歸る「人（注4）」のことで、「たびびと」と訓読し、「旅する人」の意とするのが諸家の見解であります。「餞別歌（むまのはなむけのうた）」の一つでしょう。似た用例に「行路（ギヤウロ・カウロ）」と題する

行路 遠有而 雲居尔所見 妹家尔 早将至 步黑駒（7一二七）
右一首柿本朝臣麻呂之歌集出

の一例があります。「カウロ」と読むのが一般的ですが、『万葉拾穂抄』の一説「路ヲ行ク」と訓読するのがいいでしょう。澤瀉久孝『萬

葉集注釋』では、「旅路といふ程の意」としてはいますが、歌の内容からすると、妹の家へ妻問いに行く道の途中のことをいっているようです。

歌中に、「路行」、あるいは「道行」という用語例は、

足千根乃 母之召名乎 雖白 路行人乎 孰跡知而可

(12三二〇二)

玉戈之 道行疲 伊奈武思侶 敷而毛君乎 將見因母鴨

(11二六四三)

など、いくつかありますし、「旅行く。旅を行く」などの用例はかなりあります。また、「旅」となくとも、「(地名)を過ぎ、(地名)を過ぎ」のいわゆる「道行」型もかなりあります。さらには、「東路・近江路」など「路(道)」型もありますから、これらも「旅路」の歌に入れることができましよう。

なお、「羈旅(キロ・キリヨ・たび)」ですが、「羈(羈)」は『大漢和辞典』に、「たびずまい。たびぐらし。たび。たびと。寄に通ず」とあり、「羈旅」は、「旅行。又、旅人」とあります。『万葉集』では、

柿本朝臣人磨呂羈旅歌八首(3二四九〜二五六)

高市連黒人羈旅歌八首(3二七〇〜二七七)

羈旅歌一首并短歌(3三八八〜三八九)

羈旅作(7一一六一〜一二五〇)

羈旅歌(7一四一七)

羈旅発思(12三二七〜三一七九)

天平二年庚午冬十一月大宰帥大伴卿被任大納言兼帥上京之時 倭從等別取海路入京於悲傷羈旅各陳所心作歌十首

(17三八九〇〜三八九九)

など、かなり膨大な歌の環境となっていたことがわかります。

さて、『万葉集』は、『万葉集』一冊(全二十巻)だけで読んでいたのでは十分な読解はできません。なにしろ、一、二〇〇年前の昔のことですから、生活の環境がかなりちがっています。社会や政治のちがいはむろんのこと、旅のあり方、道路そのものや、旅の手段、歩くか、馬に乗るか、舟に乗るかなど、現代の旅とは大きなちがいがありましたから。

『万葉集』の時代を知るためには、多少なりとも、『万葉集』そのものの以外の参考書が必要です。なかでも、基礎的なものは、辞書・事典です。

櫻井満編『必携万葉集要覧』

森 淳司編『万葉集研究入門ハンドブック』

などが、さしあたり便利です。その『必携万葉集要覧』の総説篇には、

羈旅発思 きりよはっし 旅にあつて思いをのべたもの。卷十二の補助的分類の一つ。古代の旅は常に生命の危険に直面していた。そのため旅立つ者は身近な女性(妻など)によって下紐などに守護霊を結び込めてもらう。一方留守を預る家人は旅立つ人の寝所をそのままに守り続けた。旅中においては峠・岬・道などの神に対して、旅の安全を祈って手向けをして通らねばならなかった。夜にはあくがれ出ようとする魂を鎮める呪術として歌を詠んだ。すなわち羈旅歌の本質は深く信仰に根ざした呪歌であつて、単なる属目詠ではなかった。むしろ国・郡などの境を場にした作が多いことから、手向けと望郷の二重の主題を秘めるものだとと言える。なお、7一二六七題の就所発思、12三一八〇〜三二一〇の悲別歌も、同類に扱ってよいか。また、後世の勅撰和歌集では「羈旅歌」の部立がたてられている。12三二七〜三二七九(計五三首)。題詞として羈旅・羈旅歌が見えているものは、3二四九題(二四九〜二五六)二七〇題(二七〇〜二七七)。三八八題(三八八・三八九)、7一一六一題(一一六一〜一二五〇)・一四

一七題（二四一七）、17三八九〇題（三三八九〇）がある。（計一一〇首）。しかし驛旅と明記していない旅の歌はほかにも多い。

となつています。また、万葉時代の旅の交通路とその手段に関しては既に、

西村真次「万葉集に現はれた交通路線の研究」（春陽堂版『萬葉集講座第二巻』）

若浜汐子「万葉時代の交通」（有精堂版『萬葉集講座第二巻』）

の懇切な調査解説がありますし、なお、

坂本太郎『古代の交通』

藤岡謙二郎編『日本歴史地理総説・古代編』

などがありますので、それらに譲り、今回は、少しく視点を変えて、旅中の歌の実態に即して、「旅路」の持つ世界を考えてみたいと思います。

三

旅路には、出発点と経過（通過）点と到着点とがあつて、点が線となり、さらに、面となつていくものですが、今回のお話は、「万葉集の旅路」への出発点にすぎませんので、どんな旅をすることになるか、私にもよくわかっていないので、旅のもつ未知の世界への旅立ちでもするつもりで、どうか一緒に旅をしてみてください。僭越ながら、万葉集の旅への道案内をさせていただきますことにします。

『万葉集』を「旅路の友」として、いざ出発しましょう。

「旅」といっても、いろいろあつたはずで、多くは、官吏の公用の旅で、これとても、一人旅、数人の旅、数十人、数百人の旅という、員数のちがひによるそれぞれ異つた旅路があり、地理的にも半日や一日で往復できる旅と、数か月、数年を要する旅、たとえば、遣新羅使・遣唐使などの海外旅行といつた旅路もあつたわけです。また、流刑

の旅もありますし、庶民の納税のための旅や、防人としての旅などがありました。それら多くの旅は、それぞれ一つ一つ、その個人に即していえば、ひとりひとりちがつた旅路であつたともいえるのですが、どんな旅路であれ、共通項というものはあるはずで、「旅路」の概念なり定義めいたことを、ここに確かめておくことにしましょう。

「旅の路」は、出発地から到着地への過程であつた、その移動の間・空間の中で、生活の本拠地である日常性（習慣性）から隔離し、家庭・学校・職場などから隔離・逸脱して行くことなのだと言えましよう。^(注)

既知の世界である生活の本拠地を離れ、未知の時空である非日常の世界にいるのだという実感を抱くことのできる環境ということになりましょうか。そういった旅路にあつては、一歩一歩既知の世界の自分が、未知の世界と全面的に対決しなければならぬわけで、その結果として、転身変心せざるを得ないような新しい環境が発現することになるはずで

たとえば、私ひとり为例にとつてみれば、日常は、大学教員として、東京に「家族」と住み、大学という「職場」で学生に講義をし、時には「友人・知人」たちと一杯飲んだりしているわけです。そういう私、夫である私、父である私、教員である私、友人である私、が、たまたま、京都・奈良へ二泊三日間の調査旅行に出かけたとなります。その旅行中の私と、同じでしょうか。ちがいますネ。新幹線の車中の私と、東京の家庭なり大学にいる時の私と同じでしょうか。ちがいますネ。同じ車中でも、行きと帰りとはかなりちがっているはずでネ。さらに、奈良の平城山のほつりを歩いている私となると、かなりちがうはずで。平城山にある私は、それまでの自分のトータルな経験や知識の中から、その時点、時点に必要なものだけを活用して、新しく出会つた未知なるものと対応することによって、私という一人の人格が変容し、新しい人格へと変身しているはずなのです。

そういう点から言えば、目に見えない、あるいは、目に見えなかつ

た、または、見えてきた、新しい「心」や「人格」を、目に見える形で、つまり、「言葉」で提示・表現しようとしたのが、「歌（文芸作品）」だと言うことができます。

四

さて、万葉集の中の具体的な作品に即して、「旅路」のありかたを味わってみましょう。ほぼ同時代に活躍したと思われる柿本人麻呂と高市黒人の「羈旅歌八首」を比較してみることになります。

柿本朝臣人麻呂の羈旅の歌八首

三津の崎 浪を恐み 隠り江の 舟公宜奴嶋尔 (3二四九)

玉藻刈る 敏馬を過ぎて 夏草の 野島の崎に 舟近付きぬ (3二五〇)

一本に云はく、「処女を過ぎて 夏草の野島が崎に 慮りす我は」

淡路の 野島の崎の 浜風に 妹が結びし 紐吹き返す (3二五一)

荒たへの 藤江の浦に すずき釣る 泉郎とか見らむ 旅行く我を (3二五二)

一本に云はく、「白たへの 藤江の浦にいざりする」

稲日野も 行き過ぎかてに 思へれば 心恋しき 加古の島見ゆ
へ二に云ふ、「湖見ゆ」 (3二五三)

燈火の 明石大門に 入らむ日や 漕ぎ別れなむ 家のあたり見
ず (3二五四)

天離る 鄙の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大和島見ゆ
へ一本に云ふ、「家のあたり見ゆ」 (3二五五)

飼飯の海の 庭良くあらし 刈薦の 乱れ出づ見ゆ 海人の釣舟
(3二五六)

一本に云はく、「武庫の海の 庭よくあらし いざりする 海人の釣舟 浪の上ゆ見ゆ」

の八首については、既に、橋本達雄氏のすぐれた論考があります。この「羈旅歌八首」を一読してみると、明らかかなことは、その旅路における思い（旅情）は、常に、家郷とその妻への恋慕にあることがわかります。

二首目の「敏馬」は「見ぬ妻」であり、一本の「処女」も「妻」を連想させるものであり、三首目の「妹が結びし紐」と明らかですし、五首目の「稲日野（印南野）」には、隠妻伝説を踏まえた上で、「加古」に「彼の子・家児（妻）」への慕情を重ねていますし、六首目の「燈火（原文。「留火」）に家郷、妻への暖かさ、なつかしさ、慕情をこめ、「家のあたり見す」と家の妻への恋しさを歌い、七首目に、「大和島見ゆ」（故郷の大和のこと）、一本に「家のあたり見ゆ（原文、「家門當見ゆ）」と、家郷への慕情を歌っています。八首中、五首が、明らかに、旅にあって家郷と妻を恋うという旅愁の歌であることがわかります。「旅の歌」の多くは、この型です。人麻呂の八首中、四首目の一首「海人とか見らむ旅行く我を」に、漂泊・浮遊・流離する旅人の境涯を歌っていることがいささか、黒人にちかひものがあるといえましよう。黒人の八首は、この「旅行く我」の持つ、漂泊・浮遊・遊離する「海人（泉郎）」的旅愁を具体的に歌っているといえましよう。

黒人の八首は、

高市連黒人の羈旅の歌八首

旅にして もの恋しきに 山下の 赤のそほ舟 沖へ漕ぐ見ゆ

(3二七〇)

桜田へ 鶴鳴き渡る 年魚市鴻 潮干にけらし 鶴鳴き渡る

(3二七一)

四極山 うち越え見れば 笠縫の 島漕ぎ隠る 棚なし小舟

(3二七二)

磯の崎 漕ぎたみ行けば 近江の海 八十の湊に 鶴さはに鳴く

(3二七三)

未だ詳らかならず

我が舟は 比良の湊に 漕ぎ泊てむ 沖へな離り さ夜ふけにけり

(3二七四)

いづくにか われは宿らむ 高島の 勝野の原に この日暮れな

(3二七五)

妹も我も 一つなれかも 三河なる 二見の道ゆ 別れかねつる

(3二七六)

一本に云はく、「三河の 二見の道ゆ 別れなは 我が背も我も ひとりかも行かむ」

速く来ても 見てましものを 山背の 高の槻群 散りにけるかも

(3二七七)

とあって、七首目に「妹」が歌われるだけで、この妹(妻)も、家郷に残した妻ではなく、旅の宿での一夜妻か、遊女か、座輿としての虚構の妻である点が、人麻呂歌とその歌の家妻恋慕型とは趣きを異にしているといえましよう。八首目は、「もみち狩り」の物見遊山の観賞

歌です。残りの六首がいずれも、旅路における漂泊・浮遊・流離の旅愁を歌っています。

黒人の歌の特色については、既に、大養孝氏(注9)・森朝男氏(注10)・池田弥三郎氏のすぐれた論考があります。

一首目は、一句目に「旅にして」とあって、「旅にあって」ということですが、その旅を原文「客」と表記しているところに、旅路にある自分を主体的に捉らえることができずに、「客体」として不安定な存在として感じていることを表現したものかと思われますし、「旅にあって」、「物恋し」とあって、「家恋し」とか「妻恋し」とか「家・妻」など具体的な恋慕ではなく、何となく、茫漠としたとりとめのないあくがれごろの状態を歌い、山の下にあった船、それは、自分が乗って来たなつかしい船であったか、でなくても、船人のいる船が、岸を離れて、沖へ向って、徐々に漕ぎ遠ざかって行くのが見えると、歌っているのです。ここには、旅の持つ、別離・隔絶の不安や愁いが、「沖に」「沖を」でなく、「沖へ」という方向性を示す助詞「へ」と訓むことによって明らかに示されているのだといえましよう。

二首目は、桜田の方へ鶴が鳴きながら列をなして飛んで行くのを見て、年魚市鴻の潮が干いたにちがいないと推量しているのです。この一首は、よく、山部赤人の、

若の浦に 潮満ち来れば 鴻を無み 葦辺をさして 鶴鳴き渡る (6九一九)

という歌と比較されますが、この二首のちがいは、黒人の歌の持つ動きのある世界と、赤人の静止した世界とのちがいをよく示しています。赤人の歌は、絵に書けば、一枚の絵に描くことができるのです。画布の左右いづれ片方に岸辺と葦を書き、飛ぶ鶴を何羽か書いて、その鶴の頭は岸に向って描き、その鶴の前方なり後方に、岸に満ちて来る潮の波頭を書けばいいわけで、岸辺の葦も、鶴も、潮も、岸の方に

吹き寄せられるように描けばいいのです。鶴も潮も葦の葉も同じ一方向に、一直線上に描ききればいいのです。動きは一方的です。書き上げてしまえば、それは動いてはいません。まったく静止した、静物画になってしまふのです。おそらく作者の眼も心も、読者の心も、静止しているはずで、そこには動きはないのです。それにくらべて、黒人の一首は、一枚の絵では描ききれません。そこには、空間的にも時間的にも、広く、永い動きがあるのです。

おそらく、作者(主体)は、朝早く旅立って、桜田・年魚市瀉を通過して来たのでしょう。その時は、年魚市瀉にはまだ潮が満ちていたはずで、それから何時間か後、進んで行く自分の頭上を超えて後方の桜田へと鶴が飛んで行くのを見て、頭をめぐらして、通りすぎてきたなつかしい既知の風景を想い出し、さらに鶴の餌を漁る習性を想い合わせて、ああ、年魚市瀉は潮が干いたにちがいないと、そのかつてみた潮の満ちた光景に、見なかった干瀉の光景を想像して、みるのです。ですから、三、四枚の連続した絵でなくては、この歌の持つ、空間的、時間的な重複した世界を描くことはできないのです。ここには、旅の持つ、旅人の移動の時間の長さ、空間の広がり、と景観の変化とが、さらには、「見たもの」と「見ないものを見る」という旅人の心の変転の軌跡を読みとることができるのです。このことは、巻五にある「羈旅作」と題する歌群中の、

年魚市瀉 潮干にけらし 知多の浦に 朝漕ぐ舟も 沖に寄る見ゆ
夕なぎに あさりする鶴 潮満てば 沖浪高み おの妻呼ぶも
(5-1-163)
(5-1-165)

の二首と比較してみても、また、巻三の、

羈旅の歌一首并せて短歌
海神は くすしきものか 淡路島 中に立て置きて 白浪を伊
子に廻らし 居待月 明石の門ゆは 夕されば 潮を満たしめ
明けされば 潮を干れしむ 潮さみの 浪を恐み 淡路島 磯隠
り居て 何時しかも この夜の明けむと さもらふに 眠の寝か
てねば 滝の上の 浅野のきぎし 明けぬとし 立ちさわくらし
いざ子ども あへて漕ぎ出む にはも静けし (3-388)

反歌

鳥伝ひ 敏馬の崎を 漕ぎ廻れば 日本恋しく 鶴さはに鳴く
(3-389)

右の歌は、若宮年魚麻呂誦む。ただし、未だ作者を審らかにせず。

という作品と比較してみても、黒人の歌の持つ、時間的・空間的な複雑さには匹敵し得ないことがおわかりになるでしょう。

第三首目は、山路を、足元を見詰めながら登りつめて、ふと、見やると、鳥隠に漕ぎ隠れようとしている小さな船が見えたというので、作者も、船も、共に動いているのである。一首目に近いものであるが、結句の「棚無し小船」に、点景としてのなつかしみ、隠れて行くものへの愛情と不安などを読みとることができます。

第四首目は、大海と同じ琵琶湖を、小舟で岸边に沿って漕ぎ廻って行く不安と、港々の、人々と鶴の群れとに出会ってほっと安堵するという、磯の岬の不安と港の安堵とが交互に日に何度となく繰り返えされる船旅の旅愁が歌われています。

第五首目は、夜、湖岸に舟をつなぎ止めて舟上で仮泊する不安を歌って、自分の命を託した舟に、危険な沖へ流されてくれるなよと強く希求している、夜と死との恐怖を歌っています。

第六首目は、第五首目の舟上夜泊の不安を承けて、今日一日の旅路の安全な宿りはどこなのだろう、高島の勝野、当時は縹渺とした原生

樹海で、徒歩では通過できず、渺渺たる海上を舟航したのですから、ここで日没となったら、今夜も舟で湖上の一夜をすごさねばならないという不安を歌っているのです。

これら六首には、旅路の実態——別離・漂泊・死の不安など——がよく歌われているといえましよう。

以上、人麻呂と黒人の羈旅歌八首を比較してみましたが大略、そのちがいがおわかりいただけたと思いますが、人麻呂的な家郷と妻への恋慕型の旅の歌は、大伴旅人の旅路の歌の一つである、

天平二年庚午の冬十二月、大宰帥大伴卿、京に向かひて道に上る時に作る歌五首

我妹子が 見し鞆の浦の むろの木は 常世にあれど 見し人そなき (三四四六)

鞆の浦の 磯のむろの木 見むごとに 相見し妹は 忘れえめやも (三四四七)

磯の上に 根延ふむろの木 見し人を いづらと問はば 語り告げむか (三四四八)

右の三首は、鞆の浦を過ぐる日に作る歌。
妹と来し 敏馬の崎を 帰るさに ひとりし見れば 涙ぐましも (三四四九)

行くさには 二人我が見し この崎を ひとり過ぐれば 心悲しもへんに云ふ、「見もさかず来ぬ」 (三四五〇)

右の二首は、敏馬の崎を過る日に作る歌。

という作品群にも共通しています。一首目から二首目の「室の木」は、天木香樹・室樹で、「室」すなわち「家妻」であり、「見し人」とは「我妹子」であり、「亡き妻」であります。「鞆の浦」という地名には「友・供（一緒・伴侶）」という掛詞で、妻を暗示しているのです。四首目・五首目の地名「敏馬」は、人麻呂の二五〇番歌の「敏馬」と同様です。このように、人麻呂と旅人に見られる型と、黒人の羈旅歌

八首とのちがいというものが、かなりはっきりしてきます。それゆえに、黒人を「旅の歌人」と称することが妥当なのだと言えるのです。

五

次に、「旅と伝説の歌人」と称される高橋虫麻呂の作品について見てみましよう。

四年壬申 藤原宇合卿、西海道の節度使に遣はさるる時に、高橋連虫麻呂の作る歌一首開せて短歌

白雲の 竜田の山の 露霜に 色付く時に うち越えて 旅行く君は 五百重山 行きさくみ 賊守る 筑紫に至り 山のそき

野のそき見よと 伴の部を 班ち遣はし 山彦の 応へむ極み たにぐくの さ渡る極み 国状を 見したまひて 冬ごもり 春

さり行かば 飛ぶ鳥の 早く来まさね 竜田道の 岡辺の道に 丹つじの にははむ時の 桜花 咲きなむ時に 山たづの 迎へ参る出む 君が来まさば (六九七一)

反歌一首
千万の 軍なりとも 言挙げせず 取りて来ぬべき 男とそ思ふ (六九七二)

右、補任の文に檢すに、八月十七日に東山・山陰・西海の節度使を任ず。

という作品は、虫麻呂が天平四年に平城京にいたことを示し、さらに、藤原宇合と主従関係にあったのではないかという一つの証拠にされている作品です。その折りの宇合の漢詩に「五言。西海道節度使を奉ずる作。一首。」において、

往歳は東山の役、今年は西海の行。行人一生の裏、幾度か邊兵に倦まむ。
(懐風藻 93)

とあって、その生涯を「行人」(旅人)としてすごし、さらに、「五言。不遇を悲しむ。一首。」においても、

賢者は年の暮るることを懐み、明君は日に新しきことを冀ふ。周日逸老を載せ、殷夢伊れの人を得たり。博學翼を同じくせね、相忘鱗を異にせず。南冠楚奏に勞き、北節胡塵に倦みぬ。學は東方朔に類ひ、年は朱買臣に餘る。二毛已に富めりと雖も、萬卷徒然に貧し。
(懐風藻 91)

とあって、「南冠楚奏に勞き、北節胡塵に倦みぬ」と中国の故事に託して、自身の東奔西走(常陸国守・安房上総下総按察使・征夷海道蝦夷持節大將軍。遣唐副使・西海道節度使・太宰帥)の一生をかこち嘆いているのです。宇合は、藤原不比等の第三子として、中央政界に安穩としていられたはずですが、実際は、不遇な行人の一生であったことが知られます。ちなみに、当時の官僚たちの官吏としての公務出張の旅はどうであったかといえますと、地方の諸国を、大・上・中・下の四等級に分け、その等級に応じて守・介・掾・目の四等官と博士・医師・史生という国司(地方官)を中央から派遣しました。その任期は四年でした。中央との政務の連絡に、年に一度、朝集使・大帳使・正税帳使・貢調使、これを「四度の使い」といいましたが、を上京させていました。また、中央から国司を監督するために、按察使・節度使・檢税使・問民苦使などが派遣されることがありました。これら官僚たちの総数は、「令」の定員数だけで言えば、国司は(四等官と史生だけで四七三人です)、それに博士・医師を加え、また、中央政庁からの使者や、それぞれの家司・僮徒などを入れれば二、〇〇〇人をはるかに越える官僚たちが、何らかの旅路にあったと見ていいので

す。そして、おそらく、下級官僚の大多数は、その一生を地方官として「県歩き」のまま終えたはずなのです。そこで、宇合の僮徒であった可能性の高い虫麻呂における「旅路」を考えてみようと思います。それには、

水江の浦島子を詠む一首并せて短歌

春の日の霞める時に 墨吉の岸に出で居て 釣舟の とをらふ
見れば 古の ことそ思ほゆる 水江の 浦島子が 鯉釣り 鯛
釣り 釣り 七日まで 家にも来ずて 海界を 過ぎて 漕ぎ行くに
海神の 神の娘に たまさかに い漕ぎ向かひ 相詔らひ
言成りしかば かき結び 常世に至り 海神の 神の宮の 内の
への 妙なる殿に 携はり 二人入り居て 老いもせず 死にも
せずして 永き世に ありけるものを 世の中の 愚か人の 我妹
子に 告りて 語らく しましは 家に帰りて 父母に 事も語ら
ひ 明日のごと 我は来なむと 言ひければ 妹が言へらく 常
世辺に また帰り来て 今のごと 逢はむとならば このくしげ
開くなゆめと そこらくに 堅めしことを 墨吉に 帰り来りて
家見れど 家も見かねて 里見れど 里も見かねて 恠しみと
そこに思はく 家ゆ出でて 三歳の間に 垣もなく 家滅せめや
と この箱を 開きて見れば ものごと 家はあらむと 玉く
しげ 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世辺に たなびき
ぬれば 立ち走り 叫び袖振り こいまるび 足ずりしつづ た
ちまちに 情消失せぬ 若かりし 肌も皺みぬ 黒かりし 髪も
白けぬ ゆなゆなは 氣さへ絶へて 後遂に 命死にける 水江
の 浦島子が 家地見ゆ
(91741)

反歌

常世辺に 住むべきものを 剣大刀 己が心から おそやこの君
(91742)

という、「水江の浦島子」という伝説を扱った作品が、もっともふさわしいと思われます。ここには、伝説上の現実の日常の生活の場から遊離して、時空を超えた不老不死の理想郷である常世の国へ遊び、再び現実世界に戻って頓死してしまうという浦島子の旅路を扱いながら、反歌で、「常世の国に住んでいればよかつのに、自分自身の心のせいで、ばかなことをしたものだ」と評しているのです。おそらく、虫麻呂自身を含めて、多くの下級官僚や大衆は、この現実の日常の生活を、憶良が「貧窮問答歌」(589二丁三三)の反歌で、

世間を 憂しと恥しと 思へども 飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば
(589三)

と歌ったように、苦しい生活をいられたにちがいないのです。一時の夢の間だけでも、現実・日常をはなれて、非日常の異郷である常世に心を遊ばせることはなぐさめになったにちがいないのです。浦島子は折角、鳥のように、いや、魚のように、この現実の日常生活から離脱して、不老不死の理想の常世の世界に行くことができたのですから、そこに安住すべきだったのです。作者虫麻呂も出来ることなら、常世に行きたいのです。だが、現実には行くことも出来なければ、また、存在するとは、本当のところ、信じてはいなかったはずですから、伝説上の浦島子の旅を夢のように追って行きながらも、この不毛の苦汁に満ちた現実の日常に立ち戻ってしまったのでしよう。「愚か人」・「おぞやこの君」は、作者虫麻呂自身でもあったのでしよう。

戻りたくない旅というものもあるはずで、出発地点に戻ることもせず、目的地点に到着することもせず、ずっと、その生涯を旅路のなかですごせたらいいという夢を抱くことがあってもいいでしょう。まさに、旅の詩人、芭蕉が、『野ざらし紀行』の旅の出発に「野ざらしを心に風のしむ身かな」と死と隣り合わせの旅を覚悟し、『奥の細道』

の旅では「日々旅にして旅を栖とす」と断じ、ついには、旅中病んで「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」という秀句を残して永遠の旅人となったようにです。

このように見えますと、宇合と虫麻呂の旅路は、かなりちがうようです。宇合は「旅人としての一生」を慨嘆していますが、虫麻呂は「旅人としての一生」を享受しようとしているように思われるのです。いみじくも、中西進氏が、その虫麻呂について論じた著書に『旅に棲む』と命名したのは至言だと言えましょう。皆様はどのようにお思いでしょうか。

六

万葉集の歌の環境としての旅路について、すこし歩いてみました。今回は、この辺で一休みすることにいたしました。また、あらためて、ゆっくり、じっくり歩いてみることにいたしました。お疲れさまでした。(平成元年七月二日初稿。平成五年十月三〇日補稿)

注

- 1 大養孝先生には『万葉の旅』(上・中・下、三冊、社会評論社刊)の他にも、『萬葉の風土』、『萬葉の風土続』、『萬葉の風土続々』(稿書房刊)がある。
- 2 露木悟義氏は、『東洋』(東洋大学通信教育部)の表紙に万葉歌碑の写真、表紙裏にその解説を昭和四十五年一月号から執筆継続中である。
- 3 上代文学会編『万葉地理の世界』所収。後『万葉歌人の研究』に「万葉人の地理空間―都城・国衛・郡家―」と改題補筆して収録。
- 4 澤瀉久孝『萬葉集注釋』
- 5 『萬葉集全注卷第七』渡瀬昌忠氏執筆
- 6 島内景二氏の『日本人の旅 古典文学にみる原型』(NHKブックス589)の「序章」の定義を参照。
- 7 「人麻呂と風土―鶴旅歌八首の地名表現を通して―」(上代文学会編『人麻呂を考える』所収)

8 卷七に、

羈旅たひりょの歌

名児なこの海うみを朝漕あさぎ来れば海中うみなかに鹿子かこぞ鳴なくなるあはれその水夫みづう

(7-417)

とある「鹿子」、「水夫」も初句の「名児」との関連から同趣であろう。

9 犬養孝「高市黒人——特に第三句目の地名表現について——」(『万葉の風土』所収)

10 森朝男「高市黒人」(有精堂版『萬葉集講座第五卷』所収)

11 池田弥三郎「高市黒人・山部赤人」(日本詩人選3)